町制施行から学研都市へ

■せいか祭り

毎年の秋になると、せいか祭りが行われます。盛り沢山なイベントに、子どもも親も、青年も高齢者も、それぞれに参加し楽しんでいます。それは、年齢や世代を超えての祭りというだけでなく、町の全体が、旧来からの住民と新しく住民になった人々との交流の場になるところにも、大きい意味があるように思われます。

毎年のこのイベントが定着し、大きくなってくるにしたがって、近くの市町村から見学にくる人々も増え、今ではみんなにおなじみの楽しい行事となっています。それらの人々を迎えるのにふさわしい町の玄関口として、駅前広場は美しくまた便利に整備され見違えるようになりました。また、駅舎も機能よく新築されました。

人々の交流。このこと自身が、精華町の大きな変化を端的に示しています。というのは、これまでに述べてきたように、精華町を含む南山城の地域は、古代から中世にたび重なる動乱の舞台を経て、近世―江戸時代には全国的にみても珍しいほどの自治組織をつくっていました。近代になって、精華町が鉄道で大都市と結ばれても、地域での生活の基本であるその仕組みは変らなかったのです。それが、いまや関西文化学術研究都市（学研都市）の中心地となって、町の住民構成や生活の仕組みの大きな変化は、避けられないものになっているわけです。

せいか祭りメイン会場　恒例のお祭りとなった〝せいか祭り〟の会場は、ふれあいを求めて参加した人たちでいっぱい（1996＝平成８年撮影）

■精華町と学研都市

1980（昭和 55）年 1 月、町議会は、学研都市の構想がすすめられるのにあたり、次のような決議をしました。

①精華町のまちづくりに基（もと）づき、これを強化し、地域の発展をはかる。

②周辺の都市基盤整備、環境の改善、地場産業（じばさんぎょう）の発展、住民生活と文化の向上に役立つこと。

③軍事研究、軍事利用を行わないこと。

④自治体に財政負担をおしつけないこと。

⑤計画段階から、資料を公開し、自治体・住民の意見を聞き、住民本位をつらぬくこと。

これに先だって、精華町には、すでに住宅・宅地の開発の波が 1970 年前後（昭和 40 年代）から寄せはじめ、町の西部の

地元野菜の即売会

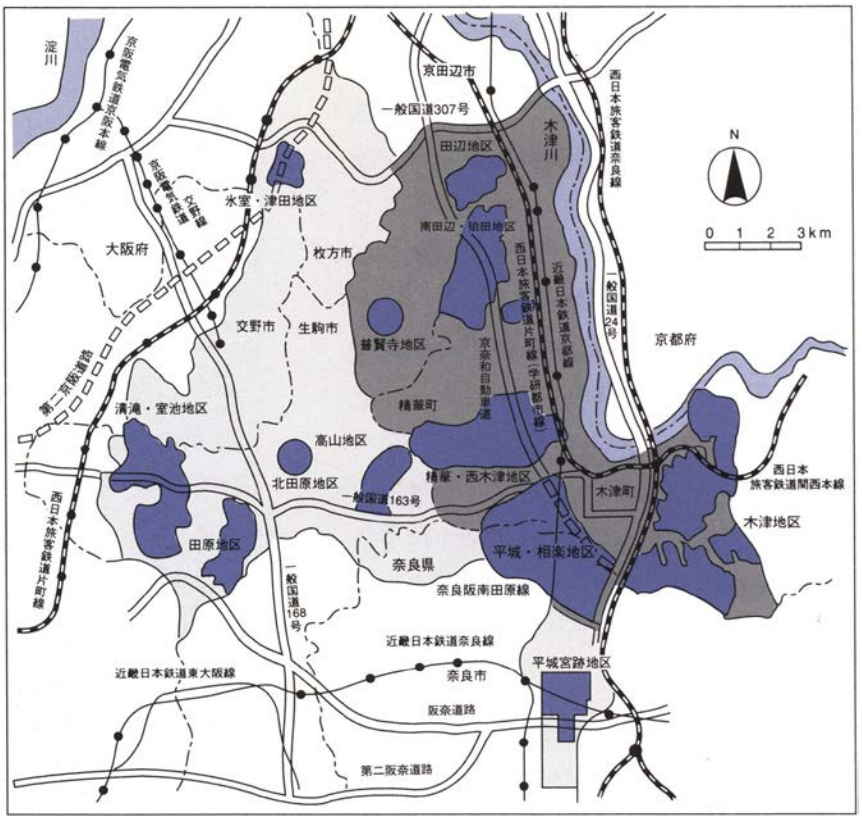
舞台発表もあります

せいか祭りを楽しむ、顔、顔、顔

関西文化学術研究都市の区域

関西文化学術研究都市の区域（京都府域）

文化学術研究地区のおおむねの位置



関西文化学術研究都市配置図　学研地区（ ■ の部分）は１ヵ所に集中させないで、緑の田園風景の中に周辺との調和を図るように散在させてあります（1997 ＝平成３年作図）

丘陵地（きゅうりょうち）でも住宅・都市整備公団や大手の開発業者が山林などを買収していきました。しかし、こうした動きは、1973（昭和 48）年秋の石油危機の後に日本全体の景気が後退したので、足踏み状態になりました。ところが、1978（昭和 53）年に発表された学者グループによる学研都市構想は、町にとっては衝撃的（しょうげきてき）なもので、期待と不安が渦巻（うずま）きました。そこで、地元にとって好ましい学研都市建設が進められるにはどうすればよいか、いち早く独自の研究会がつくられ、いろいろな調査結果の検討が始まったのです。上記の決議は、それらのとり組みにあたっての地元の基本姿勢がよく示されています。

学研都市の構想は、学界から、政府・京都府などの官界や産業界もまきこみ、1987（昭和 62）年には関西文化学術研究都市建設促進（そくしん）法によって正式に国家的プロジェクトとなり、その基本方針に基づいて、翌年に各府県での建設計画が最終的に固められました。その結果、12 の文化学術研究地区のうち、精華町には中心地区となる精華・西木津地区のほか、南田辺・狛田（こまだ）地区、平城・相楽地区の３つの地区が関係し、まさに学研都市の中心地になったわけです。

1915（大正 4）年に完成した隨道（ずいどう）の通水記念碑とレンガの入口も
今は記念公園内にあります

けいはんな記念公園では自然林がそのまま残されました
（公園全体の 70％）

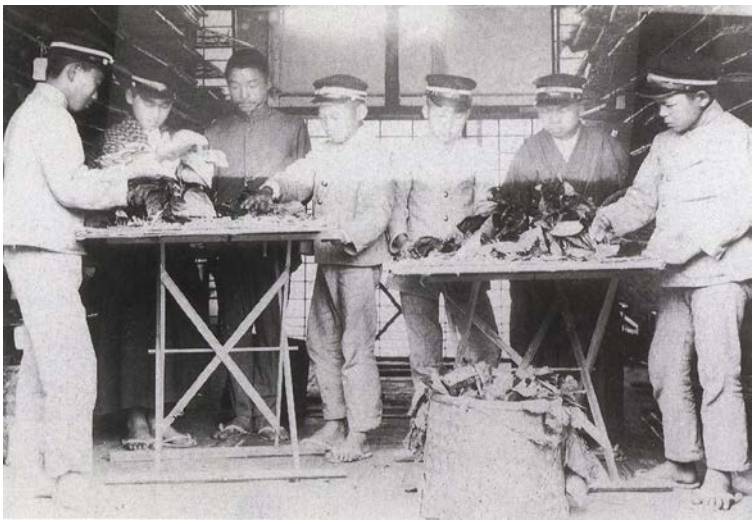
国土地理院（2008 ＝平成 20 年撮影）

けいはんなプラザ

ＡＴＲ
（国際電気通信基礎技術研究所）

国立国会図書館関西館

精華大通りをはさむ学研都市の中心地域　ＡＴＲやけいはんなプラザ、国立国会図書館関西館などがあります



昔の子どもたち　相楽郡立農林学校で蚕（かいこ）に桑の葉をやる実習の子どもたち
（1913＝大正２年５月）　松田安司提供

新しい景観は、開発地域と農村地域、また自然環境との調和がはかられていくでしょう。

その中で、住民の心もいっそう融（と）け合っていくでしょうし、今後が楽しみです。ことに、子どもたちは、古くからの伝統文化・歴史的達成と国際的にも最先端の近代科学の成果との、両方を学びながら成長し、やがては広い世界へ飛びだっていくのです。そのとき、彼らにとっても、自分たちの生い育ったかけがえのない郷土となる精華町は、今後もさらなる充実と発展を続けていくことでしょう。

■新しい郷土へ

精華町には、関西文化学術研究都市の中心地として、文化学術研究交流施設（けいはんなプラザ）や関西文化学術研究都市記念公園（けいはんな記念公園）、国際電気通信基礎技術研究所（ＡＴＲ）、国立国会図書館関西館、けいはんなオープンイノベーションセンター（ＫＩＣＫ）のほか、民間の研究所などさまざまな中核的・中枢的な施設が立ち並んでいます。

これらの施設を加えて、精華町の

伝統行事に参加する子どもたち　いごもり祭の３日目、南北に分かれて綱を引き合います
（1996＝平成８年１月撮影）

英語のゲームを楽しむ子どもたち

中国からのお客様の筆使いにみんな注目

折り紙を折る

達筆で「中日友誼（ゆうぎ）」と書かれています（右）

現代の子どもたち　精華町ではさまざまな国の人たちが働き、いろんな国からのお客様がたくさん訪れています